

前作で激発したほ場では土壌くん蒸を！

(1) 前作で本病が激発したほ場では、定植前に土壌くん蒸を実施します。また、周辺のほ場や御自身が管理されている別のほ場への拡大が心配される場合も、土壌くん蒸を行います。土壌くん蒸には、以下のいずれかの薬剤を使用してください。

- ①キルパーを定植 10 日前までに 60L/10a かん注
- ②ディ・トラベックス油剤を定植 14 日前までに 30~40L/10a かん注
- ③バスアミド微粒剤またはガスタード微粒剤を定植 14 日前までに 30~60kg/10a 土壌混和

(2) 土壌くん蒸時にはポリフィルム等で被覆します。これにより、地表付近の薬剤濃度が高まり、地表付近の菌核を減らすことができます。また、被覆資材としてガスバリア性フィルム(ハイバリアー、バリアースターV等)を利用すると、薬剤の大気への揮散を低減させ、土壌中の薬剤濃度を高めます。ほ場の隣に住宅などがある場合やより土壌くん蒸の効果を高めたい場合は、利用を検討してください。

【参考】秋期における殺菌剤の処理適期が天気予報などで判断できる理由

黒腐菌核病菌がネギに最初に感染する時期は、10~11月の日平均地温が15℃程度に低下する時期です(図)。このため、殺菌剤の処理適期は、感染直前である9~10月の日平均地温が継続して20℃以下に下がり始める時期です。この時期の「日平均地温」は、「日最高気温と日最低気温の平均値」とほぼ同じです。

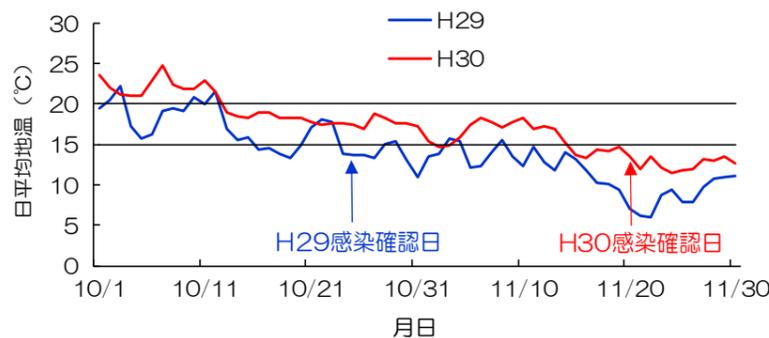


図 10~11月の日平均地温と黒腐菌核病菌の感染が最初に確認された時期

- 注1) 試験は砂質土のほ場(匝瑳市)において実施
- 注2) 日平均地温はネギの茎盤部付近で測定
- 注3) 黒腐菌核病菌の感染は、PCR法により確認

〇〇地域の天気予報			
	今日	あす	あさって
最高気温	26℃	25℃	24℃
最低気温	14℃	15℃	16℃

秋期における殺菌剤の処理適期は、9~10月の日最高気温と日最低気温の平均値が継続して20℃以下に下がり始める時期です。

この資料は、県単プロジェクト研究事業「環境に配慮したネギ黒腐菌核病総合対策システムの構築」で得られた成果を基に作成したものです。さらに詳しい情報を知りたい方は、以下をご覧ください。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/ninaite/seikafukyu/documents/r4-05-negikurokintaisaku-b.pdf>
発行 令和5年3月 千葉県・千葉県農林水産技術会議
問い合わせ先 千葉県農林総合研究センター土壌環境研究室 TEL 043(291)9990

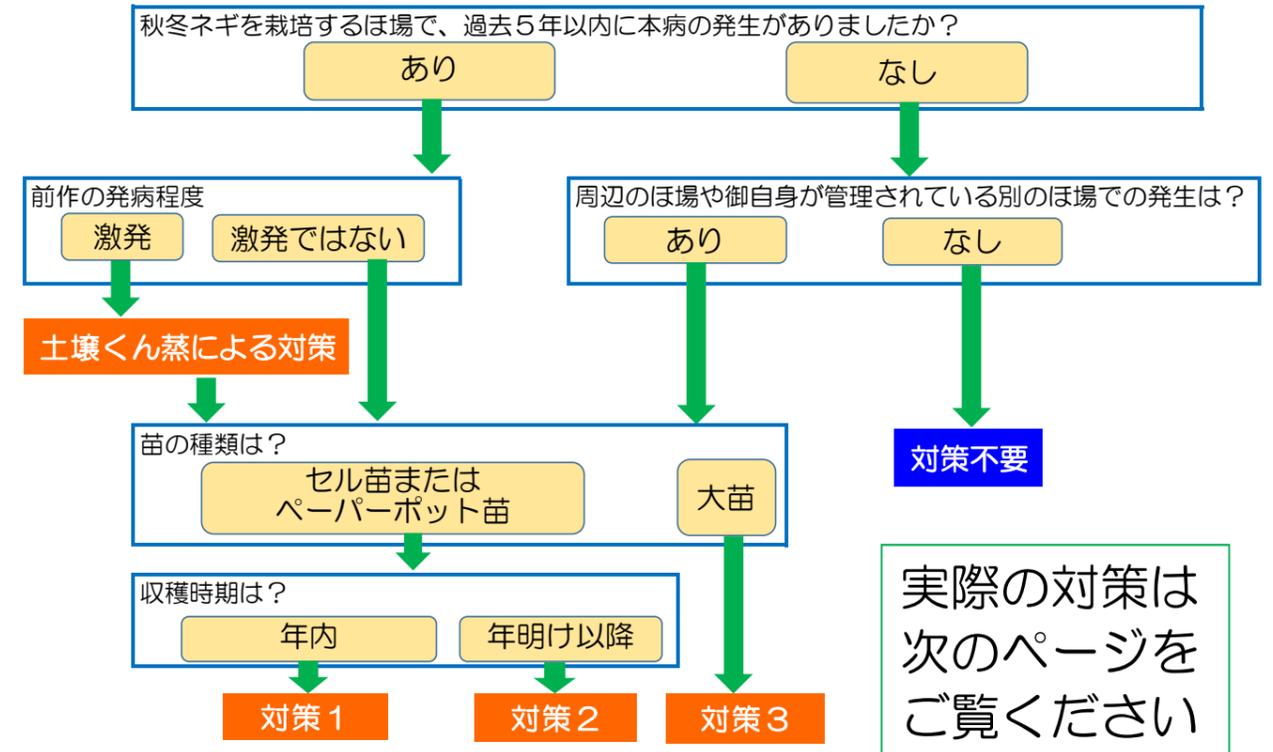
秋冬ネギ生産者の皆様 黒腐菌核病でお困りではありませんか？

本病は、低温期に葉先が枯れ、その後軟白部が腐敗し、黒色の菌核を多数発生します。この菌核は、数年にわたって土壌中で生存し、次作の伝染源になります。

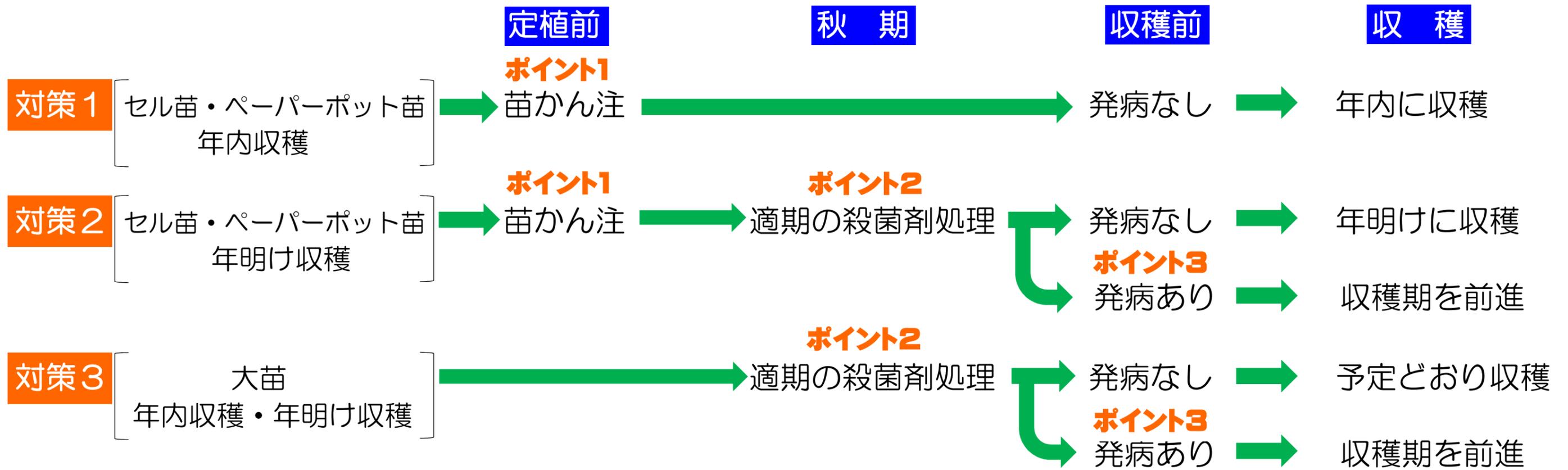
過去の発生程度、今作の苗の種類と収穫時期で対策が決まります。3つのポイントも併せてご紹介します。



図の矢印に沿ってお進みください



「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、本資料を無断で複製・転用することはできません。



ポイント1
定植前の苗かん注！



パレード 20フロアブル
100倍 0.5L/トレイ
育苗期後半～定植当日

薬効が持続するため、年内の発病を抑制します。夏秋期の大雨により冠水した場合や、収穫時期が年明けになる場合は、秋期に殺菌剤を使用します。

※大苗の場合は、農薬登録上の適用がないため（令和4年9月1日現在）、苗かん注は実施できません。

ポイント2
適期に殺菌剤処理！



秋期における殺菌剤の処理適期は、天気予報などで判断可能です。9～10月の日最高気温と日最低気温の平均値が継続して20℃以下に下がり始める時期が処理適期です（【参考】参照）。以下の殺菌剤を処理してください。

- ・パレード 20フロアブル
2,000倍 100～300L/10a
- ・アフェットフロアブル
1,000倍 1L/m² 株元かん注

ポイント3
収穫期を前進！

- 黒腐菌核病が発生してしまった場合
- ①健全株を早期収穫
 - ②罹病残さを持ち出し適切に処理
 - ③他のほ場を汚染しないため、ほ場を移る際は農業機械を洗浄

次作に向けて発病しにくい環境づくり

